

2023年10月22日

「神に栄光あれ」

ローマの信徒への手紙 16:25-27

竹島 敏牧師

私たちが生きている現代もまた、イエスの福音から私たちを引き離そうとする力が働いています。教会の説く福音が何の役に立つのか、信仰など争いのもとになるだけではないかと。しかし25節において、今や現わされるに至った神のご計画なる光は、実は長き世々にわたって闇の向こう側に押しやられていたのだ、とパウロは説いています。私たちの日常においても光と闇の戦いが様々にあることを想います。しかし、決して闇は光に勝つことはなかった、そして今や光は強く私たちの前に姿を現した、とパウロは宣言しています。

私たちは、神の被造物同士の関係がひどく損なわれ、紛争によって人の命の尊厳が踏みにじられる時代を生きています。27節においてパウロは「栄光が神にあるように…」と述べていますが、神による創造の初めのように、被造物同士の関係が喜ばしいものである時、神の栄光は輝くのです。その神の栄光も壊されつつある、分裂し、混乱した世の闇が深まる現実の中に、パウロはあえて信仰によって光を見出すよう私たちに促しているのです。対立し合いながらも同じように救いを求めて歩み続けているその人達との、壊してしまった関係を再建していく過程を経て、神の栄光は取り戻されてゆくのです。パウロが多用する「よろしく」と訳されている言葉には、「互いに包みこみ合う」という深い意味があります。全ての者が主ご自身の宣教の業の中に互いに包みこみ合い導き入れられる時、小さな光も闇の世を照らす光とされて輝き始めるとパウロは信じたのです。そのために何をせよと、神は私たちに言われるでしょうか。心を静めて神からの促しの声に耳を傾ける、それが1週間の初め、この主日に私たちがなすべき第一の務めなのです。